

かき うどんこ病について



図1 発病葉（葉裏）



図2 発病葉（葉表）



図3 病斑上に形成された子のう殻

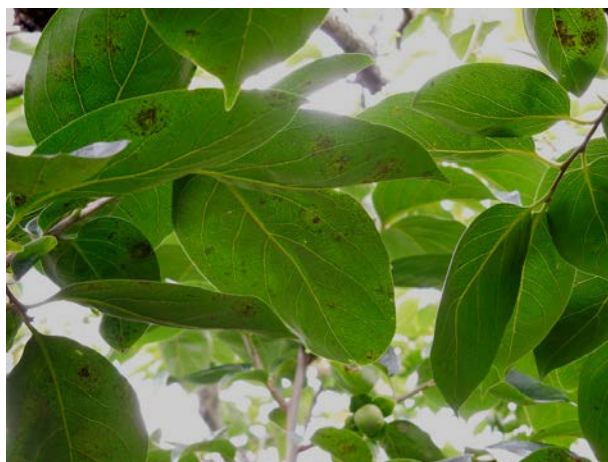


図4 多発ほ場での発生状況

1 生態

うどんこ病 (*Phyllactinia kakicola* Sawada) はカキの葉のみに発生する。本菌は絶対寄生菌であるため、生きた植物のみに寄生する。多発するとうどん粉をまぶしたような病斑が葉裏全体を覆い尽くし、樹勢の低下や早期落葉を招くため、果実肥大に影響をおよぼす。

初発生は5～6月よりみられる。はじめ葉表に円形小黑点があられ、これが集まり墨を塗ったようにみえる。夏期高温時には病勢は衰えるが、8月下旬頃より葉裏に白い粉状の病斑がみられるようになる。これは白い菌糸や分生子であり、徐々に拡大する。

秋期になると病斑上にはじめは黄色くしだいに黒褐色となる小粒が現れる。これは子のう殻であり、これが枝や幹などに付着して越冬する。翌年4月から5月に子のう胞子が飛散し、一次伝染源となる。葉に付着した胞子は菌糸を伸長させ、気孔より葉内部に侵入感染し小黑点をつくる。

2 発生状況

初発は5月頃にみられ、夏期高温時には病勢は衰えるが、8月下旬より再び発生がみられる。少雨乾燥条件で発生が助長される。生育適温は15～25℃と低く、夏期が冷涼に推移すると病勢は衰えず、発生が多くなる。

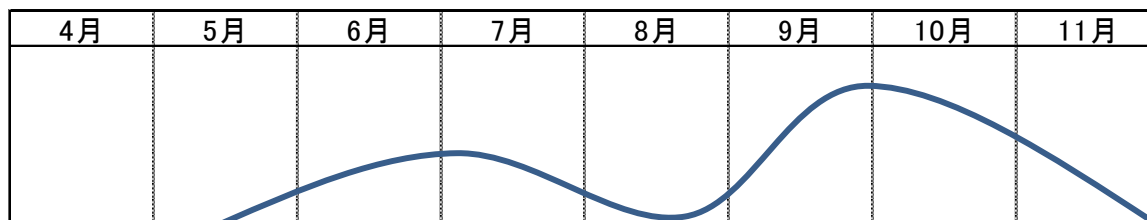


図5 うどんこ病発消長

3 防除対策

(1) 伝染源の除去

越冬は枝や幹などの樹上で行う。枝に子のう殻の付着がみられる場合は剪定時に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

(2) 予防の徹底

初発時の5月、発生が拡大する6月、気温が低下し病勢が回復する8月下旬に予防を徹底する。なお、散布にあたっては、同一系統薬剤が連続しないようローテーション防除を行う。